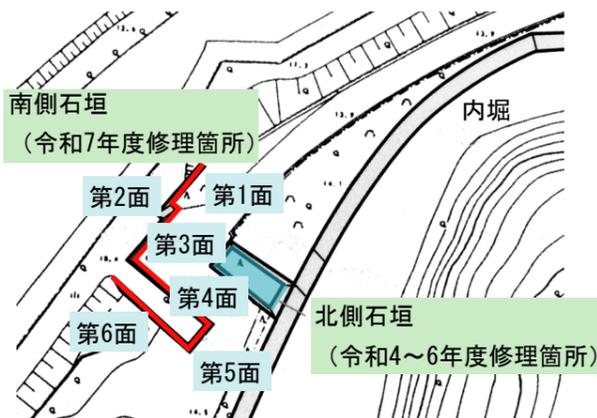


特別史跡姫路城跡 南勢隠門の石垣修理

はじめに

南勢隠門（みなみせがくしもん）は姫路城西側の内堀と船場川の間に位置し、勢隠曲輪（せがくしくるわ）の南西からの虎口（こぐち・城の出入り口）でした。北と南の石垣を喰い違わせ、防御のために通路を屈曲させています。石垣間には、北側を内とする櫓門を設けていました。

石垣は凝灰岩（ぎょうかいがん）を使った打込みハギです。姫路城の石垣編年Ⅱ期（池田時代）に築かれたとされますが、一部に落し積みが確認でき、南勢隠門周辺で石垣修理の記録の残る第1次と第2次榊原時代に部分的な積み直しが行われた可能性があります。また、令和7年度に修理する南側石垣の東端部は昭和41年（1966年）に解体修理が行われているため、石垣の様相が少し異なります。



令和6年度の石垣修理

南勢隠門石垣修理は令和4年度から始まり、昨年度までに北側の修理を終えました。令和4年度に門の北側石垣において、内部に空洞が出来ていたことが確認されたため、令和6年度は石垣北東部において立面積14㎡分の解体修理を行いました。

解体に伴う調査では、石垣上の南辺で土塀基礎の石列が見つかっています。

石垣内部については、上部では裏込め栗石層の幅が狭く、盛土内に揚羽蝶文の軒瓦等を含むことから、築城以後に解体修理を受けていたことが明らかとなりました。



昭和の解体修理前の南勢隠門の南側石垣（北東から）



令和6年度 北側石垣解体修理（北から）

今回の石垣修理の概要

今年度は南側石垣の修理を行っています。南側石垣は高さが約3～4m、西側へ続く箇所と合わせて延長約59m、立面積が約189㎡あります。門内側の西側に10段の石階を設けていました。使われている築石は、石階や隅角石を含めて約500個です。

修理の内容は、抜け落ちた築石間の間詰石の補充です。間詰石は残存するものを参考に、玉石と割石を併用しました。ただ、現状では昭和の修理部分に玉石が見られないことから、今回の修理では、その範囲は割石の

みを使用することとしました。

刻印は発見できませんでしたが、矢穴痕跡が残る石材が多くみられます。矢穴は、矢口の長径が9～12cmのもので、昭和の修理箇所も含めて石材はほぼ江戸時代のもと考えられます。今回の修理とそれに伴う調査では、姫路城跡の虎口の変遷と石垣の様相について、資料を得ることができました。



第4面 立面図 修理前（北から） ※矢印は昭和修理の推定範囲境

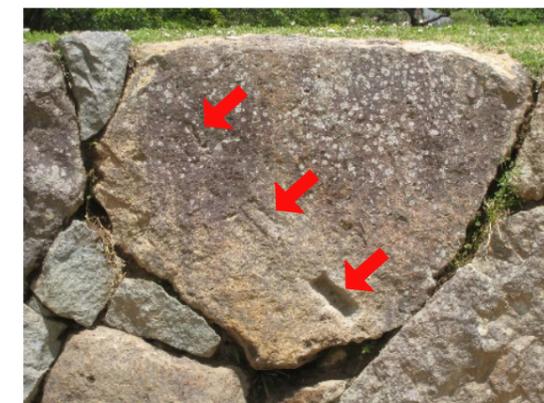


第6面 立面図 修理前（南から）

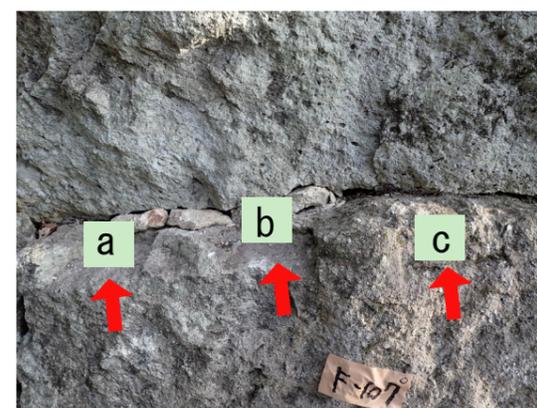
矢穴と間詰石

修理範囲の石垣は打込みハギであり、石を割るための矢穴の痕跡を多数見ることができます。第6面F107石材では、矢穴の位置を設定した基準の枠線を全て彫らない段階で石を割った痕跡も確認されました。

間詰石は玉石と割石を併用しています。発掘調査により、城が機能していた頃は間詰石を密に挿入していたことが確認されています。



《参考》 彫り終えた矢穴と設定線〔天守の庭〕



第6面F107石の矢穴(a・b)と設定線(c)



《参考》 過去の発掘調査で見つかった江戸時代の間詰石〔内船場蔵南石垣〕